

【実践研究報告書】

個の実態に基づいた音楽Ⅰの学習展開の研究

～客観的な実態把握を通して～

高知県立盲学校 教諭 父田由美

1 研究の成果と課題をふまえた平成28年度の実践内容

(1)平成27年度の研究内容

平成27年度に派遣された高知大学大学院では「発達障害を持つ生徒に対する障害特性を補う学習方略の個別指導」をテーマに「①適切な実態把握の方法」と、それに基づく「②適切な支援法」について研究した。

(2)成果と課題

高知大学教育学部特別支援相談室での発達障害生徒に対する実態把握・所見の作成・指導計画の提案・指導計画の実施・指導結果の検証という一連の相談業務を実施した。適切な実態把握を行った結果、学習のつまづきが発達障害に起因しないことが分かった例もあり、正確な実態把握の重要性が分かった。それらの方法を学べたことが成果であるが、検査を行う技術・それらを解釈する力・それに基づいた総合所見を作成する力・総合所見から支援案を作成する力の更なる必要性を感じた。また、教育相談を行う際の課題の一つとして、教育相談を行った後、学校現場や家庭で教育相談の内容が実施されないことが多いと知った。

(3)平成28年度の実践内容

学校現場では教育相談業務を担当していないが、今年度採用10年経験者研修での研究の機会もあったため、昨年学んだことを教科指導(音楽Ⅰ)の中で実践した。

ア 研究目的

これまでの教員生活では幼児児童生徒の実態把握を主観的に行い、授業内容を決めていたが、今回の研究では生徒の実態把握を検査等により客観的に行い、そこで得られた正確な実態把握に基づいて授業づくりを行う。併せて、それらの結果と実践から得られた対象生徒に対する効果的な指導法に関わる教員で共有していくことと、生徒自身にも効果的な学習法を身に付けてもらうことを目的とした。

イ 研究方法

(7)研究対象

高等部普通科1年生の音楽Ⅰの授業(1名)で行った。対象生徒は、地域の中学校から今年度本校高等部に入学してきた弱視の生徒で、視力は右眼が0.1(矯正視力0.2)、左眼は光覚なしで、見え方は視野狭窄がある。現在は健康で運動制限はないが中学校までは体育の授業等も見学をしてきたことから身体を動かすことの経験不足が日常生活に顕著に現れている。利き手は左。補装具は時々眼鏡を装着する。視覚障害であることを受容しきれておらず補助具の学習などには前向きではない。

(4)研究経過

保護者から承諾書をいただいた後、「WISC-IV」による発達検査を行い(5月30日)、その結果を受け「子どもの強さと困難さアンケート(SDQ)」「S-M社会生活能力検査」(担任6月3日、保護者6月8日)・CPT-AX(6月9日)・IVA-CPT(6月13日)を行った。

2 平成28年度の実践の成果と課題

(1) 結果

様々な検査や質問紙、行動特徴から総合所見を出した。それに基づいて作成した指導・配慮案を音楽の授業の中に取り入れ実施した内容の成果と課題から考察を行う。

総合所見1つ目の「視覚情報の正確な判断の弱さと視覚刺激に対する衝動性」から視覚障害を補うための学習を考えた。まず本人や保護者がその学習に前向きになれるよう、「見える」ことの良さを感じられる教材を工夫した。この学習は盲学校であることから全教員が行っている内容であり、情報も共有しながら行えた。今後も継続していく。2つ目の「一度にたくさんのことを言われると全体がつかめず理解が不十分になる」「他からの刺激で注意の制御が困難」からユニバーサルデザインの授業作りを行うことにした。教室環境を整備したり、見通しの持てる授業を計画したり、明確なめあてを決めての授業を行った。見えること、聞こえること等あらゆる刺激にその都度反応してしまう生徒だが落ち着いて取り組める時間を多く取ることができた。3つ目の「全体的に不注意である」からは、短時間で身に付くことではないが、授業内でできることとして実技用の教材に注視できるものを用意し、得意な聴覚での情報も入れながら少しずつ注意力を付けようと取り組んでいる。4つ目の「不器用であるが丁寧さが無い」についても同様に短時間で身に付くものではないが、ノートの評価欄をなぞって行うものにし、少しずつ取り組んでいる。5つ目の「時間制限がない課題だと落ち着いて取り組める」に関しては特に力を付けたい内容は授業の最後に計画し、ノートまとめの時間まではじっくりと取り組めるようにしている。

(2) 成果と課題

「個の実態に基づいた音楽Ⅰの学習展開の研究～客観的な実態把握を通して～」をテーマに今年度研究に取り組んできた。昨年度、大学院で学んできた内容を授業実践で生かしていくために年度当初に様々な検査等を行って客観的な実態把握を行うことから始めた。

「この生徒はなぜここでつまづいたのか」と感じた時に検査結果を見直すことでその後の指導法が分かり、授業を改善しながらここまでやってくることができた。また客観的なデータがあることで情報を共有する際、説得力のある情報になり、保護者や周りの先生方にも協力してもらいやすかった。しかし、さらに説得力のあるものとし、他の先生方も実践して下さるものにするためには私が行ってきたことで、実際生徒が変わったとの成果がなければ難しいと考えた。生徒はこの10ヶ月で多くの成長が見られたが、それは私の研究だけの影響ではない。また、当初の目的では、効果的な指導法を、関わる教員で共有していくことと、生徒自身にも効果的な学習法を身に付けてもらうこととしていたが、関わる教員との情報は共有できたが指導法の共有までは至らず、生徒自身にも「これをやったからこうなるのだ」と認識するまでには至らなかった。

今回の研究は試行錯誤しながらも意味のあるものと考え、今後もこういった内容で授業をぜひ計画していきたいと感じる。一方で、自分の授業での実践は生徒数の少ない本校だからできたのではないかと感じている。特別支援教育がはじまって10年、特別支援教育の専門性はますます必要となってきた。今後は特別支援コーディネーター等の協力も得ながら、幼児児童生徒たちが自分にあったペースで学んでいける環境を作り、他の教員とも協働して取り組んでいけるよう、学び続けていきたい。

<引用・参考文献>

- ・ 高知県教育委員会(2013)すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～、高知県教育委員会
- ・ 岡崎慎治・前川久男・二上哲志・立川和子・松田素子・市川正嗣(1996). 注意欠陥多動性障害児の注意の評価と注意に及ぼす methylphenidate の効果ー連続遂行課題および遂行時の事象関連電位での検討ー. 小児の精神と神経, 3, 225-238.
- ・ 上野一彦・松田修・小林玄・木下智子(2015)日本版 WISC-IVによる発達障害のアセスメント 代表的な指標パターンの解釈と事例紹介、日本文化科学社